

居酒屋

ぽったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

11

目次

暖簾の向こうに戻る日……………275

親に寄せる信頼……………211

檜のカウンター……………143

仏滅結婚式……………77

顔合わせ……………5

顔合わせ

イカナゴの釘煮

筑前煮

ササミのたたき

串揚げ

中着煮

塩味のハンバーグ

茸雑炊

東京下町で居酒屋『ぼったくり』を営む美音は、恋人である要との結婚を決意、それに伴って『ぼったくり』を店舗併用住宅に改装することにした。

客たちへの説明や挨拶を終え、店は十二月二十日をもって無事休業に入ったものの、年明け早々に始まる工事や結婚式の準備に忙しい毎日である。

妹の馨がやってきてためらいがちに訊ねてきたのは、そんなある日のことだった。

「ねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんたちが結婚したら、タクはどうなるの？」

タクというのは、一昨年の夏、近所の公園に捨てられていた五匹の子猫のうちの一匹だ。すったもんだの末、要が引き取ってくれて、今は要が母の八重と住む

家で暮らしている。

要が美音と結婚して『ぼったくり』の上に引越してくるとしたら、タクはどうするのだろうか、というのが馨の疑問らしい。

「タクの飼い主は要さんだし、やっぱり一緒にこっちに来るのかな？」

馨は大の猫好き——というよりも動物から人間まで、ありとあらゆる生き物が好きだ。子どものころからペットを飼いたがっていたが、飲食業に携わっていた両親の反対で叶わず、両親が亡くなったあとは自分たちが店を引き継いでしまった関係で、今もペットは飼っていない。この商売を続ける限り仕方ないことだと見はしているのだろうかけれど、生き物をこよなく愛する馨としては、タクの今後が気になってならないに違いない。

馨の質問を聞いた美音は、ちよつと答えに困ってしまった。

子どもにせがまれて飼ってはみたものの、しばらくしたら当の本人が飽きて世話をしなくなり、やむなく親が面倒を見ている、というのはペットにまつわる話としてはよく聞く。要の様子から察する限り、タクもどうやらその状態にあるら

しい。

とはいっても、要の場合は飽きたり忘^なけたりで世話をしなくなったわけではない。仕事が忙しい上に出張も度々あるので、事実上不可能というだけで、自分が家にいるときはちゃんと世話をしているし、それなりにタクも要に懐いているよ
うだ。

ただし、タクは普段餌をくれる人間が誰かということとはちゃんとわかっていて、八重と要を比べたとき、八重のほうがヒエラルキー上位だと判断しているらしい。引き取ってやったのはおれなのに、なんて薄情な！ と要は憤慨するが、タクは涼しい顔……

話を聞いた美音は、まったく侮^{あなど}れない猫だと苦笑してしまった。

八重は八重で、「もしも、ここに美音さんが入ってきたら、タクは美音さんとお前のどっちが上だと判断するのかしら？」なんて面白がっているそうだ。

拾われたばかりのとき、タクは哺乳瓶からミルクを吸う力すらなかった。そんなタクに一晚中付き添い、手の上に垂らしたミルクを舐めさせ続けて命を繋いだ

のが美音である。

もしもタクに、ちゃんとした記憶回路と『恩』という概念が備わっているならば、美音を要よりも上に位置させてもおかしくない、と八重は考えているらしい。

結局、おれはこの三人のうちで最下位ってことか、と要はへこみまくっているが、タクも案外、美音のことなんてすっかり忘れているかもしれない。

いずれにしても、命を繋いだ美音、それを引き受けた要、双方ともにタクの処遇については真剣に考える責任があった。

「要さんが『ぼったくり』の上に引越してくるなら、当然タクもついてくるんだよね？」

「うーん……でも……」

「『飲食業だし……』って言うんでしょ？ もう聞き飽きたよ。でも、タクはもう要さんが飼ってるんだよ？ 捨ててこいなんて言えないでしょ？」

「そんなこと言うわけじゃないじゃない！ そうじゃなくて……」

「じゃなくて？」

「タクがこっちに来ちゃったら、八重さんが……」

ふたりの結婚にあたって、八重はひとりで今の家に残ることを選択した。新婚の邪魔をするなんてもつての外、困ることがあったらすぐ相談するし、どうにもならないときは長男の怜^{れい}が住む家に戻るといふ手もある、と……

そのほうが気楽だという本人の言葉に甘える形になったが、この上タクまでこちらに来てしまったら、八重は本当にひとりぼっちになってしまう。せめてタクだけでも八重のそばに残すべきなのではないか。そう思う反面、それでは要が拾った猫を無責任に置き去りにすることになるといふ思いもある。

そもそも、飲食店の上で動物を飼うことにためらいがある。家と店が離れていたときでさえ、両親は頑^{かたく}なに拒んでいた。だからこそ、今まで美音は生き物を飼うことをしなかったのだ。

ところが、同じ両親に育てられたというのに、馨は至って気楽に言う。

「大丈夫でしょ。だって、住居と店はきっちり分けてあるんだし、店に入らないようにしておけば問題ないよ」

「そうはいかないわよ。だって、うちはどんなお客さんが来るかわからない居酒屋なのよ。もしもお客さんが猫が嫌いな人だったらどうするの？ 中には、嫌いじゃないけどアレルギーがある、って人もいるかもしれないわ。家に猫がいたら、やっぱり影響がゼロとは言えないんじゃない？」

かつて同級生に、動物がとても好きなのに、お父さんがアレルギーで飼うことができないと言っていた子がいた。犬や猫にアレルギーがある人間は、けっして珍しい存在ではないのだ。

「そっか……アレルギー……」

さすがにこれには馨も頷かざるを得なかったようで、ちょっと遠い目をして呟^く。

「そういえば、マサさんやアキラさんが言ってた。換毛期^{かんもうき}とかになると絨毯^{じゅうたん}は猫の毛だらけ、普段だつてうっかりすると洗濯物にもくっついてたりするんだつて……。アレルギーを持ってるお客さんが来ちゃったら大変だよな」

「でしょ？ だからって、連れてこないで言えないし……」

「だよー……」

あの捨て猫騒動のとき、引き取ってくれたことにあんなに感謝しておきながら、今になって邪魔者扱いなんてできるわけがない。なにより、美音自身、タクと暮らせるなら嬉しいに決まっている。

いずれにしても、美音にとってタクの今後は悩ましすぎる問題だった。

+

「タクねえ……。あたしにしてみれば、クロの兄弟猫が戻ってくるのは嬉しいけど、『ぼったくり』にとつてはちよつと難儀だねえ」

そう言いつつウメは、膝に抱いた飼猫のクロの背中を撫でる。

庭に向かってちんまりと正座するウメと膝の上で丸くなっている黒猫は、まるで一幅の絵いっかくのようで、見ている美音はつい微笑んでしまう。

ちなみにふたりがいるのはウメの家の縁側。美音は、結婚式で親代わりを引き

受けてくれたウメに、式の相談をするために訪れていた。

「難しいね。生まれたあたりに戻ってくるんだから、タクにとつてはそのほうがいいんじゃないかとも思うし、猫は家に付くつていうから今の住まいから動かすのは酷な気もするし……」

どっちがいいんだろう、いつそタクが口をきければいいのに、とウメはため息をついた。

「ウメさん、タクが口をきけるってことは、たぶん兄弟猫のクロちゃんも口をきくんじゃない？」

マサさんのところのチャタロウも、アキラさんのところのミクも、アキさんのところのマツジも、みんな揃ってしゃべり出しちゃったらそれこそ大変だわ、と美音は笑う。

五匹揃って、それぞれの飼主の悪口を言い出す『猫会』を想像したのか、ウメも困った顔になった。

「うちなんていつも安物のネコ缶だーなんて言うのかねえ」

「言うかも」

「それはまた切ないね。たぶん猫同士はそういう会話もしてるんだろうけど、人間には聞こえないのが救いだね」

「でしょ？ でもまあ、だからこそよく考えてあげなきゃいけないんでしょ？ けど」

口がきけない者たちだからこそ……というのは、ウメの持論だし、美音もそのとおりだと思う。

そして、口がきけても、いつだって「好きにしないさい」とばかり、寂しい気持ちも悲しい気持ちも表に出さない要の母、八重のことが頭を過る。

八重はもうすぐ、ウメ同様ひとり暮らしになる。ウメは、近所に息子夫婦がいるし、『ぼったくり』に來れば常連たちとのやりとりもある。孤独と会話の少なさは認知症を助長すると言われているが、ウメの場合はその心配はかなり少ないはずだ。

だが八重の場合、要が結婚して家を出てしまったら、一日中誰とも口をきかな

い日が出てくる可能性もある。しっかりした人だし、今のところ認知症の心配は少ないかもしれないが、あまりにも寂しい暮らしに思えた。

「まさか要さんのおっかさんまで『ぼったくり』の上に住むってわけにもいかなしいし、かといって美音坊たちがあつちに住むわけにもいかない。そんなことをしても、おっかさんは喜ばないに違いない。だとしたら、やっぱりあんなたちが頻繁に顔を出すしかないだろうね。もしこっちにタクを連れてくるつもりなら、タクも一緒にさ」

結婚するにあたって美音は、『ぼったくり』の常連で同じ商店街で薬局を営むシンゾウに、店の休みをもう一日増やしてどうか、と提案された。その話を知っているウメは、休みを増やすなら多少は時間に余裕ができるのではないか、と言うのだ。

「面倒だっと思うかもしれないけど、ちょくちょく行っておやりよ」

「面倒なんて……」

「いや、美音坊じゃなくて要さんのほう。男坊主つてのは、外に出てしまえば、

案内親のことなんて構わなくなりがちだし、そこは美音坊がしつかり手綱を握つてさ」

うちのカナコみたいに、とウメは鼻をふふんと鳴らした。あからさまな嫁自慢ではあるが、ちっとも嫌な感じはしない。ウメの息子であるソウタと妻のカナコは、美音から見ても羨ましくなるような夫婦だし、姑のウメからこんなふうに褒められるのも素敵だ。

八重に褒められたいわけではないが、夫婦円満のためにも見習うべきところは多かった。

「わかった、そうします。ありがとうございます、ウメさん」

そんな答えを返しながらも、八重はそれで満足してくれるだろうか、と一抹の不安を覚える美音だった。

+

店の片付けをあらかた終え、自分自身の荷物の分別にかかっていたある日、仕事帰りの要が自宅を訪れた。要は珍しく、美音の顔色を窺うように覗き込んで訊ねる。

「あのさ、もし嫌なら断ってくれていいんだけど……」

「なんでしよう？」

「うちのクソ爺とクソ兄貴が君に会いたいって言ってるんだ」

「え……？　でも、もうお祖父様にはお目にかかってますよ？　お兄様とも電話でお話ししましたし」

以前、祖父の松雄は『ぼったくり』を訪れたし、兄の怜は二度電話をかけてきた。いずれも美音と要を別れさせる目的だったのだが、美音がまったく聞く耳を持たなかったせいで、インターネット上の掲示板に『ぼったくり』の悪評を書き込むという作戦が実行された。それでも彼らの思うような効果は上がらなかった。それどころか、常連や近隣が束になっての抗戦ぶりに、松雄と怜はさぞや驚いたことだろう。

今では彼らも美音と要の仲を認めてくれているようではあるが、美音としてはやはり気まずさを消しきれない。まるきり初対面というわけではないし、できれば改まっでの挨拶云々は避けたい気持ちが大きかった。

要は、自分の身内がいかにも理不尽なおこないをしたかわかっているせいか、ひどくすまなそうに言う。

「あっちにしてみればこの間のことは『ノーカン』、つまり、なかったことにしてほしいんじゃないかな。その上で、初めて会う、みたいなシチュエーションにしたいとか……。ごめん！ 本当に勝手だし、どの面下^{めんげ}げてって話だよな」

だから、断ってくれても……と要は念を押すように言った。

「こんな話、おれのところで切り捨てちゃおうかと思ったんだけど、さすがにそれでもできなくて。あんな連中でも、身内には違いないし……」

「そりゃそうですよ。なにより、あの一件は私も悪いんです。そもそも、賞味期限切れの鰻^{うなぎ}を使ったりしなければ、お祖父様たちもあんなことはなさらなかったでしょうし……」

火のないところに煙は立たないと言うではないか。ついている隙を作ったのは他ならぬ自分だ、という自覚はある。だから、要の祖父や兄が、なかったことにしてくれと言うのであれば、素直に頷ける気持ちがあった。

「あのときは、私もずいぶん失礼な対応をしたと思いますし『ノーカン』にしていただけののなら、むしろありがたいです。結婚する以上、ご家族に挨拶なしでわけにはいきませんしね」

「おふくろにはもう会ってもらってるし、おれとしてはどうでもいいんだけどね。でも、ここで会わせないといつまでもごちゃごちゃうるさそうなんだ。それぐらいなら、さっさと会ってもらったほうがいいかなと思って」

「私が言うのも失礼ですけど、確かにそんな気がします」

「だろ？」

そう頷いたあと、要は内ポケットからスマホを取り出し、早速電話をかけ始めた。ところが、しばらくは普通に話していたのに、途中でにわかに声が大きくなった。続いて、なにかを必死に断り始める。

「だから、今は休業中だと言ってるだろ？ そんなの無理だって」

「美音だって、今は店の改装や結婚式準備の真っ最中。そんな時間はないよ」

「そもそも、そんなことをしなきゃならない筋合いは……」

そこで要は、心配そうに窺^{うかが}っている美音の視線に気付いたのか、ふう……と息を吐いた。さらに、耳元からスマホを離して、美音に話しかける。

「爺……と兄貴が美音の料理を食ってみたいんだってさ。噂に名高い『ぼったくり』の料理に興味津々、本当に面の皮が厚い連中だ！」

「なんだ、そんなことですか……」

お安い御用……と答えかけて、美音は言葉を切った。

料理を作るのは簡単だが、場所がない。店は無理だし、この家に佐島建設の会長と社長を呼びつけるわけにもいかない。要の言うとおり、片付けの真っ最中、足の踏み場もないのだ。かといって、佐島家の本宅で、というののもっと無理だ。現在、要と八重が住んでいるのは、都内にしてはけっこう大きな三階建ての一軒家である。要は仕事三昧^{さんまい}だし、家の管理はほとんど八重に任せきり。佐島家の

本宅は、その八重ですら、もう大きな家の管理はできないと逃げ出すほどの家だと聞いた。きっと『大邸宅』と呼ぶレベルだろう。

そんな家の台所で、普段どりの料理が作れるだろうか。正直、美音には自信がなかった。

「お料理するのは全然構いませんけど、場所が……」

戸惑う美音に、要はあからさまにほっとした顔になる。何度断つてもしつこく食い下がる相手に、辟易^{へきえき}していたのだろう。

「じゃあ、料理すること自体はOKなんだね？」

「それは全然。でも、あんまり大きなおうちでは……」

「でっかい台所なら仕事がいやすいかと思っただけで、そうでもないのか……。あ、じゃあいつそおれの家なら？ 前に一度、あそこで料理をしてくれたよね」

あの台所ならどうだろう、と要は相変わらず電話の相手を放置したまま訊ねた。要の家の台所は、確かに覚えていいる。夏風邪を引いた八重のために茶がゆを炊いた場所だ。

ずいぶん機能的に作られていたし、一度使ったことがあるからそれなりに勝手もわかる。少なくとも、佐島家本宅よりもコンパクトな造りのはずだ。

「あそこなら、たぶん大丈夫です」

「OK、じゃあうちにしよう」

その後要は、電話の向こうとこっちに質問を繰り返しながら日時を決めた。言葉遣いや内容から、電話をかけてきたのは兄の怜だったようだ。それは、最後の挨拶からもわかった。

「じゃあ兄貴、またな」

その瞬間、美音はあることに気付いてはっとした。終話ボタンを押そうとしている要を慌てて止める。

「要さん！ ちょっと待ってください！」

「なに？」

「なにか苦手なものとかあれば、お聞きしておきたいんですが」

「聞き出してわざと山盛り入れてやるとか？」

「そんなことしません！」

「冗談だよ。兄貴も爺もおれと同じ。苦手なものは……」

「納豆？」

「ビンゴ」

要は笑い、電話の相手を「納豆フルコースだってさ」なんて脅している。そして、唾然としている美音を尻目にあっさり電話を切った。

納豆のフルコースが出てきて一番困るのは自分のくせに……と美音は嘔き出しそうになる。

母は京都生まれ、西の人間の息子としては納豆を食品と認めないのは正しい、と要は言い張るのだ。

東京生まれの東京育ち、西で暮らしたこともなくせに、こんなときばかり西の人間のふりして……とつい苦笑してしまう。

とはいえ、美音も要同様、母は西の人間だ。美音自身、納豆はどちらかというと苦手な部類、店の献立にもあまり使わない。もっともそれは、納豆を料理する

と調理器具に匂いが移ってしまう、それでは心底苦手な人に嫌な思いをさせかねない、という父の方針によるものだが……。いずれにしても、要が納豆大好き人間じゃなくてよかったと思う。

食の好みが一致するというのはかなり大事なことだ。出会いは最悪に近かったけれど、要の祖父と兄が揃って納豆が苦手だというのなら、案外上手くやっていけるのではないか。

緊張感満載の訪問を前に、美音はほんのちよつとだけほつとしていた。

十

「要さんのおうちで料理？ それをお祖父さんとお兄さんに食べてもらうの？ だったら、あたしも一緒に行くよ！」

翌日、話を聞いた馨は鼻息荒く宣言した。これには美音もびっくりである。

「え……？ でも、たぶん私ひとりで大丈夫……」

「なに言ってるの！ 相手は、お姉ちゃんと要さんの仲を裂こうとして、あんなことをした人たちなんだよ！ 虎の穴に飛び込むようなものじゃん。ひとりで行かせられるわけがないよ！」

「それはありがとう、って言いたいとこだけ……」

そこで美音は、表情を読むようにじっくり馨の顔を見つめた。咄嗟に目を逸らした妹に、くすりと小さな笑みが漏れる。

「本当は、要さんの家を見てみたいだけじゃない？」

「うわ、ばれた！ で、でも半分、半分だけだよ？ 半分はちゃんと心配してるんだからね！」

「はいはい、ありがとね。とっても心強いわ。でも大丈夫、取って食われるわけじゃないでしょう」

「わかんないよ？」

いきなり正座させられて、尋問されるかも……と馨は茶化した。

ドラマの見すぎじゃないのか、と苦笑したが、馨の言葉には心底姉を心配する

気持ちがこもっている。要の自宅への興味はゼロじゃないにしても、心配を数値化できるとしたら、半分では留^{とど}まらない量だろう。

「本当に大丈夫よ。いくら難しい相手だったとしても、伊^{だて}達に何年も客商売をやつてゐるわけじゃないわ」

「お客さんとの関係と、これから家族になる人間とじゃ話が違ふよ。とにかく、あたしも一緒に行くから！」

料理を作りに行くとはいっても、こちらが訪問者であることに違いはない。行くから、と言われても、勝手に人数を増やしていいものかどうか、判断に迷うところである。

だがそこで、返事に困っている美音に気付いたのか、馨がぱつと顔を輝かせた。

「ねえ、もういつそ、まとめて家族紹介ってことにしてもらったら？」

「家族紹介？」

「うん。結婚するときって親だけじゃなくて、兄弟に会ってもおかしくないでしょ？　これから家族になるんだから、顔合わせは必要だよ」

結婚式そのものが顔合わせの場になることもあるだろうけれど、要と美音の結婚式は参加者の数も多そうだ。親族以外の招待客が山ほどいる中でゆっくり紹介はできないだろう。それなら、前もって顔合わせを済ませておくというのもひとつの方法だ、と馨は言うのだ。

「そう言われればそうね……。じゃあ、まとめて顔合わせってことにできませんか、って要さんに頼んでみようかな……」

そう呟きながら、美音はひとり、ふたりと指を折り始める。人数を把握したあと、これならいける、と判断し、早速要に電話を入れた。

「顔合わせ？」

「ええ。どうせならお祖父様とお兄様だけじゃなくて、お祖母様とお兄様の奥様にもお目にかかれればいいな、って……だめですか？」

「だめなわけがないよ。実は、兄貴たちが君の料理を食べるって話を聞いて、兄貴の嫁さんやお祖母さんにけっこうちくりちくりやられてたんだ。でも、人数が増えろと君が大変だってことで、なんとか勘弁してもらった」

どこかで必ず機会を設けるから、と当てのない約束をしてしまったらしい。しばらくはなんとかごまかせるだろうけれど、この先どうしよう……と要自身が困っていたそうだ。

「なんだ……じゃあちようどよかったんですね」

「渡りに船。でも本当に大丈夫？」

「もちろん。一度に済むし、人数が多いほうがあれこれごまかしがききます」

「みんなが君に注目するよ？」

「それは平気です。これでも私、客商売ですから」

店の客が自分を見ることには慣れている。しかも、要の祖父と兄はどちらかというとき寡黙な部類らしいし、間を持たせるための会話なんて望めそうにない。それなら人数を増やし、女性陣にも参加してもらったほうが、気詰まりな沈黙を避けられるのではないか。

美音はそんなふうに考えたのである。

「そのかわり、こちらからも馨を連れていかせてください。その人数だと、やつ

ぱり助手がほしいですし……」

「是非。顔合わせなんだから、馨さんがいなくちゃ話にならない」

「ですよね。それで、人数は……」

そこでふたりは、参加予定者を数え始めた。

「お祖父様とお祖母様、お兄様ご夫婦にお母様……五人でOKですか？」

「プラス君と馨さんとおれ。顔合わせなんだから、呑んだり食ったりはみんなではないと」

「そうでした」

じゃあ、全部で八人ですね、と人数を確定したあと、美音は早速献立を考え始めた。

次々料理の名をあげる美音の声を聞きながら、要は、ため息を抑えられない。いつもながら、美音の潔さに頭が下がる。

祖父や兄との過去の経緯にまったく頓着していない様子というだけでも見上げ

たものだと思うのに、慣れているとは言い難い台所で作る料理の量をさらに増やすという。どう考えても、並大抵の心臓ではなかった。

「お酒はたくさん召し上がりますか？」

「おれの家族だからね。おふくろはランチャタイムでも平気で一杯やるタイプだよ」それを聞いた美音が、電話の向こうで思わせぶりに笑った。なんとなく、もう知ってます、と言わんばかりの笑い方で、要は不思議な気持ちになる。母と美音が昼食を共にした機会などなかったはずだが……と首を傾げていると、美音の取り繕うような声が飛び込んできた。

「お母様のことはわかりました。それで、他のご家族は？」

「みんなおれの家族だからね。クソ爺と兄貴は酒豪、他もそれなりだよ」

「それなりというと？」

「ウワバミとまでは言わないけど、それなりに呑むってこと。もちろん、君ほどじゃない」

要の言葉に、美音はひどく不満そうな声を出した。

「要さん、私がどれぐらい呑むかなんてどうしてわかるんですか？」

付き合い始めてから、ふたりで食事に行く機会も増えたし、酒を呑むこともある。とはいえ、少し呑んでしつかり食べて、がふたりの基本だから、限界まで呑んだことなど一度もない。

それでどうして私の酒量が見極められるんですか、と美音は問い詰めるような口調で言った。真剣そのものの声に、思わず要は嘖き出しそうになる。

「だって君、自分で申告してたじゃないか。潰れたことなんてないって」

以前、無理やり店を閉めさせてバーに連れ出したことがあった。そのとき、カウンターに並んで腰掛けて聞いた中に、美音を潰して『お持ち帰り』しようとした先輩を返り討ちにした、という話があった。それだけでも美音の酒の強さを知るには十分だ。そもそも酒のファーストトライで、メロンフィズを立て続けに二杯呑んだにもかかわらず、ちよつとふわふわしたただけだという。しかも当時の美音は小学生だったというのだから、末恐ろしいにも程がある。

「君は酒に強い。たぶん酒豪だよ。否定できる？」

「できません……せん……」

根っからの正直者、嘘なんてつけないからこそ、否定はできなかったのだろう。そして、美音はひどくつまらなそうに言った。

「お酒に強いって、女にとっては褒め言葉じゃないですよ。むしろハンデ」

「なんで？」

「だって……隙がない感じで、可愛くないでしょ？」

そもそも呑み会も合コンも、十中八九、介抱役になってしまう。くだを巻く友人を四苦八苦してタクシーに押し込んだり、具合が悪くなった友人を部屋まで送っていたり……。部屋に入ったとたん、玄関先で眠り込まれ、布団だけかぶせて帰宅したこともある、と美音は不満をぶちまける。

友人たちは美音が酒に強いことも、とんでもなくお人好しで面倒見がいいことも知っているから、美音が参加しているとき、あてにして羽目を外すことが多かったそうだ。

それでは、美音が楽しむことなどできつこない。もちろん、誰かと良い雰囲気

になることも……

「つまらないですよ、酒に強い女なんて。自分で望んだわけじゃなくて、最初から強かったんです。もうね……お父さんとお母さんの遺伝子を返上したいぐらいでした」

美音はぶつぶつ言い続けているが、要としては、彼女の両親の遺伝子にはこの先も全力で頑張ってほしい。

その酒の強さ故に、誰かと深い仲になることもなかったのだ。無事、自分のところに辿り着いたのが、両親の遺伝子のおかげだとしたら、感謝感激雨あられだった。

「まあ、職業柄、酒には強いほうがいいのは確か。問題ないよ。ということでは本題、本題」

慰めにもならないようなことを言ったあと、家族の嗜好しこうをあれこれ伝えながら、ふたりは献立の検討を再開した。

「いらつしやい、美音さん！ ようこそ、馨さん！」

『顔合わせ』当日、食材その他、運ぶものも多いだろうから、ということでは要が車で自宅まで迎えに来てくれた。そして要といつしよに彼の家に入ったところで、八重の熱烈歓迎を受けたのである。

玄関先での出迎えは予想の範疇ではあったが、八重の後ろからふたりの女性がひょっこり顔を出したのには驚かされた。

「ごめんなさいね。約束の時間にみんな一緒に来てもらうつもりだったんだけど、どうしても舞台裏が見たいって……」

迷惑でしょうけど勘弁してね、と詫びながら、八重は要の祖母の紀子と怜の妻の香織を紹介した。

面食らいはしたもののそこは長年の客商売、無難に挨拶を返す。同時に、これは当然の成り行きだろうとも思う。

もしも逆の立場だったら、美音だって、どんな料理をどんな風に作り上げるか知りたい、間近でつぶさに見たいと思うに違いない。特に、要と八重が口を揃えて絶賛する、プロの料理であればなおのことだった。

とはいえ、今日の美音は『ぼったくり』の店主としてここに来たわけではない。あくまでも要の婚約者として挨拶に来たのだから、普段のようにカウンターの向こうとこちらに分かれっぱなしの状態はためらわれた。

和気藹々とはいかないまでも少しは距離を縮めたい。美音がそう考えていると、八重がこれまたすまなそうに言う。

「本当にごめんなさい。そのかわり、お手伝いできることがあったらなんでもするから言ってね」

それを聞いてはっとした美音は、八重の言葉に甘え、佐島家の女性たちに頼み事をすることにした。

とはいえ、美音の頼みは単なる『お手伝い』ではなかった。

「香織さんは怜さん、紀子さんは松雄さん、八重さんは要さんが一番好きなお料

理を作ってくださいませんか？ みなさんがどんなお料理、どんな味付けをお好みか教えていただきたいんです」

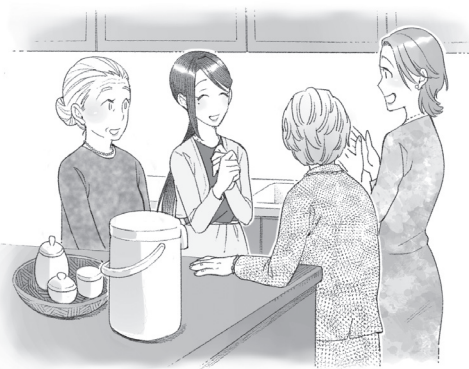
いずれは家族になるのだから料理だけではなく、他のことについても教えたり教わったりしていきたい。美音は自分の申し出に、そんな思いを込めた。だが、それがちゃんと伝わるかどうかは、相手の受け取り方次第。若干の不安を覚えつつ、美音は女性陣の言葉を待った。

「そうね！ 家族の集まりなのにひとりだけが台所に立つなんておかしいわよね！」

まず八重がそう言って大きく頷いてくれた。続いて紀子もにつこり笑う。

「せっかくの機会だから、美音さんにプロのお料理を習いたいって思っただけど、私にも美音さんに教えられることがあるなんて嬉しいわ」

八重はもちろん、紀子の好意的な発言に、美音はひとまず胸をなで下ろした。けれど、最後のひとり、香織は見るからに眉を顰^{ひそ}めている。そして、その表情のまま口を開いた。



「お料理を作るのはかまわないんですけど、怜さんが好きなのって、子どもみたいなものばかりなんです。カレーに唐揚げ、ハンバーグ……わざわざ作るようなものじゃない、っていうより、作り甲斐のないことこの上なし！」

聞いた途端、その場にいた香織を除いた四人の女が噴き出した。思い当たることがたつぷりあるらしい要も、くつくつと笑っている。

「兄貴は昔から脳みそばかり磨いてて、舌は置き去りだったんじゃない？」

「まったくねえ……。どうしてこんなに違いが出ちゃったのかしら？ 同じものを食べさせて育てた要は、それなりに大人の味覚になってるのに……。ごめんなさいね、香織さん」

嘆かわしい、と言わんばかりの顔で八重が謝った。

香織は即座に、お義母様のせいじゃありません、好き嫌いはあくまでも本人の問題です、ときっぱり否定した。

そのやり取りを聞いていた馨が、美音にこっそり囁く。

「嫁姑問題よめいづこはなさそうだね」

香織と八重は言うまでもなく、八重と紀子の間も円満そうだ。そうでなければ、夫を放置して八重の住む家に先乗りしてくるわけがない。

とかく嫁と姑はうまくいかないと言われがちだが、この様子なら美音と八重もきつと大丈夫。馨は、心底安心したようにそんなことを言った。

——馨は、私が佐島家の人たちに虐められないか心配してくれてたのね……

いつも心配させるばかりだった妹が自分を心配する、そのくすぐったさに結婚とはまた違う幸せを感じた。

姉妹のやりとりで気付かなかったのか、はたまた気付いていても知らぬふりをしてくれたのかは定かではないが、佐島家の女性陣は美音と馨をそっちのけで冷

蔵庫の中を覗き込んでいる。

「あら……お料理を作るのはいんどけど、材料がないわ。今日は美音さんがお料理してくれるって聞いてたから、お買い物もしていないし……」

「ごめん、母さん。おれが、美音が食材をたくさん持ち込むだろうから、冷蔵庫を空けておいてって言ったせいだよね」

「たまたまよ」

八重は要の言葉を否定するように笑う。食材のことまで考えなかった自分を責めながら、美音は慌てて前言を撤回した。

「すみません！ そんなことなら、お料理は……」

「とんでもない。材料なんて買いに行けばいいだけのこと。ってことで、お義母様、香織さん、お買い物に行きましょう。要、車を出してね」

「はいはい、どこへなりとお連れしますよ、奥様方！」

やけくそのような言葉に、香織が嬉しそうに言う。

「おれは美音と一緒にいたいのに」って、顔に書いてあるわよ。でも、私たち

は運転できないし、お願いね、要さん」

「おやおや……それは申し訳ないわね。でもスーパーまで歩いていくのはちょっと……ってことで、美音さん、要をお借りするわね」

「お気をつけて」

「あら、意外とあっさり『貸し出す』のね」

その言葉にぎよつとしたような顔をする美音、そして要をひとしきり笑ったあと、佐島家の女性たちは『運転手』を引き連れ、賑やかに出かけていった。

八重たちにも料理を作ってほしいと頼んだ以上、さっさと作業を終えて台所を明け渡さねばならない。ここからはスピード勝負、とばかりに美音は腕まくりをする。

馨も同じくエプロンの紐をぎゅつと締め、ふたりは料理に取りかかった。

怜と松雄が八重の家にやってきたのは、約束の時刻よりも一時間も早い午後五時だった。

「あら、もう来ちゃったの？」

なんて、約束の時間よりも半日以上早く来た自分たちを棚上げにして紀子が言う。

「いや、今日は土曜日だし、急ぎの用もなかったし、な……」

松雄が、とってつけたような言い訳をする。

「でも、怜さんは、今日はどこかにお出掛けになってから、って言ってませんでした？」

香織に訊ねられた怜も、あの予定は別に今日じゃなくてもよかったから……と口の中で呟いている。

結局みんな待ちきれなかったのね……と美音はこぼれる笑みを抑えられなくなる。

美音に会いたかったのか、美音の料理を食べたかったのか、あるいは美音が持ってくるに違いないとびきの酒を吞みたかったのか。

いずれにしても、全員が予定よりも早くやってきた。美音はそれが嬉しくてな

らない。

長年の客商売だし、客相手に失礼なことをして叱られた経験もない。けれど、こればかりは客とは同列に語れない。要の家族に受け入れてもらえなかったらどうしよう……と不安でならなかったが、どうやらその心配はなさそうだった。

大勢で進めているせいで台所はてんやわんや、それでも和やかに会話しながら料理していると、要がやってきた。

「先に呑み始めちゃっていいかな？」

「じゃあ要さん、お酒は野菜室に入ってますから選んでください」

「大役だな」

そう言いながら冷蔵庫を開けた要は、中の様子に目を見張った。

「これ、既に野菜室じゃないよね？」

「ごめんなさい。占領しちゃいました」

野菜室には酒が詰め込まれていた。『ぼったくり』で出される酒のうち、特に

人気が高いだろう銘柄が何本も、それに日本酒だけではなく、ビールもワインも入っている。たくさんありすぎて、選ぶのは至難の業だった。

助けを求めるように美音を窺ったのに、彼女は素知らぬ顔をしている。

今日の集いは、ある意味嫁試しのシチュエーションだというのに、なんでおれが美音に試されることになっちゃうんだ……と脱力しながら、要はいったん野菜室という名の酒蔵を閉めて、美音に向き直った。

「最初に出す料理は？」

「要さん、ワンポイント獲得！」

ふたりのやり取りを聞いていた馨が、高らかに宣言した。

料理との相性も考えずに酒を取り出すようでは、『ぼったくり』店主の連れ合いは務まりません、なんて、したり顔をする馨を、要は軽く睨んだ。

「おれだって、それぐらいはわかってるよ。それで？」

「まずは、イカナゴの釘煮です」

そう言いながら、美音は濃い青色の小鉢をお盆にのせる。

中高に盛られているのはイカナゴの釘煮だ。瀬戸内に面する地域で二月から四月頃までに取りれるイカナゴを使って作られ、春の風物詩のひとつとなっているこの料理は、生のイカナゴを煮た姿が折れ曲がった釘のように見えることから『釘煮』と呼ばれているそうだ。

要も食べたことがあるが、少々甘みの勝った濃い味付けが、ご飯のおかずや酒の肴にもってこいの逸品だった。

少し大きめに育ったイカナゴをさつと釜ゆでにして生姜醤油で食べる方法もあるが、保存性では圧倒的に釘煮が勝る。イカナゴが手に入る地域では、春先に作ったものを小分けにして冷凍し、一年中楽しむのが常だと聞いていた。

「これ、私の友だちがお母様と一緒に炊いたものなんです。毎年春になると、たくさん送ってくれて……」

美音曰く、せっかくの友人の心遣いだから商売に使うことはせず、家族で大事にいただいている、今日は親族の集まりだし、突き出しにちょうどいいと思って持参したとのことだった。

密閉容器に入った釘煮を、八重がちらちら見ていた。それに気付いたのか、美音はにっこり笑って八重に手の平を出させ、一箸のせている。八重は目を輝かせ、早速ぱくりとやった。

「そうそう、こんな味だったわ。これ、ちりめん山椒とはちよつと違うけど、生姜がきいて美味しいのよね。お酒にもぴったり……」

日本酒の冷やと一緒にいただいたら、さぞや美味しいでしょう、と八重は吞兵衛そのものの台詞を口にする。見たところ、八重や紀子、香織の料理は既に終わったようで、作業をしているのは美音と馨だけ。彼女らにしても、最後の仕上げや盛り付けを残すのみのだろう。

これなら……と要が誘いをかける前に、美音が口を開いた。

「ありがとうございます。皆さんも、あちらに……」

要たちと一緒に吞み始めることを勧めた美音に、八重はあっさり首を横に振った。

「そうさせていたきたいのは山々だけど、美音さんと馨さんを置き去りにはで

きないわ」

ここはお店じゃないんだから、あなたたちだけを働かせておくわけにはいかない、と紀子と香織も口を揃えた。

「本来、美音さんたちはお客様なのに、お料理をしてもらっただけでも申し訳ないと思ってるわ。そうじゃなくても、女は台所にこもりっぱなし、なんて前時代的すぎるし」

そんな台詞を口にしたのは、意外にも一番年長者である紀子だった。どうやら、男が呑んで女は働く、という姿に前々から不満を覚えていたらしい。

確かに今は男女平等の時代。酒食を提供する商売ならまだしも、普通の家庭で女性だけが立ち働いているのを気にする人も多くなっているだろう。ホームパーティの場合もホスト夫妻が並んで、あるいは交替で料理をするという形が増えてきているようだ。おそらく紀子は、客が来たら女性は大所にもりきり、というのが当たり前の世代。それだけに、逆戻りはまっぴらごめんと思っている可能性も高かった。

とはいえ、料理はほぼ終わっている。このまま女五人で台所にいてもすることはない。そう思っただろう美音は、再度八重たちを促した。

「大丈夫です。もうほとんど終わりました」

「あら……そうなの？」

「そうなんです。突き出し代わりのイカナゴの釘煮のあとは、お刺身の盛り合わせ、ヒラメの昆布締めも入っています。旬なので脂がしつかりのって、淡麗なお酒にもよく合うんですよ。申し訳ありませんが、これ、あちらに運んでいただけますか？」

そう言うと、美音は刺身の大皿を香織に渡した。さらに、刺身に続く料理の説明を添える。

「お野菜は和え物、サラダ、筑前煮の三種類です。鰯がもうすぐ焼き上がりますし、手羽先もグリルに入っています。ピリ辛のタレを塗って焼いたので、大人の味わいです」

——ピピッ、ピピッ、ピピッ……

ちようどそのタイミングでタイマーが鳴り、手羽先が焼き上がった。美音は手早く料理を皿に盛り付け、今度は八重に渡す。

「冷めないうちにお願ひします。私たちもお魚が焼けたらすぐに行きますから」美音の言葉で、八重たちは急ぎ足で大きな座卓が据えられた客間に移っていった。新鮮な刺身と、焼きたての手羽先に、早く食べたい気持ちを増幅されたのだろう。

美音が鰯いわしの焦げ目を確かめながら訊ねてくる。

「お酒決まりました？」

「うん、決まった。これにするよ」

そう言いつつ要が取り出したのは『久保田 千寿』。新潟にある朝日酒造株式会社あさひしゅぞうの代表的銘柄である。まろやかな口当たりと穏やかな香りを持つ吟醸酒で、全国で広く愛されている。ふくよかな甘みが、イカナゴの釘煮やヒラメの昆布締めこぶしめの味を引き立ててくれるはずだ。

「お見事です」

美音が、難問を解き終えた生徒を褒めるように頷いた。要は自慢げに、ふふん、と鼻を鳴らし、酒瓶を手てに客間に向かった。

座卓の一番上座は松雄、隣に怜、要が座っている。反対側は、紀子、八重、美音、馨、香織と女性陣が並ぶ。『顔合わせ』という目的上、当初、美音と馨の席は松雄の向かいに用意されていたのだが、調理の関係で席を離れることもあるし卓の中心が望ましいだろう、と八重が席替えを提案してくれたのだ。

美音と要を別れさせようとした『処理』の件には触れない、という暗黙の了解はあるものの、面と向かうのは気まずい……と思っていた美音は、八重の配慮に頭かぶが下がる思いだった。

それぞれの盃ははに酒が満たされた。

「では始めましょうか」

家主の八重の声で宴が始まる。どの盃に入っているのも日本酒。とりあえずビールという発想は微塵みじんもない家らしい。美音にしてみれば、嬉しいような、恐ろし

いような……だった。

そつと馨を窺^{うかが}うと、馨もこつちを見ていて、日本酒で乾杯ってすごいよね、と美音だけに聞こえるような声で囁く。さすがは姉妹、思うところは同じらしかった。座卓の上には、所狭しと料理が並んでいる。

八重と要のふたり暮らし、しかも普段要は留守がちである。食器、特に大皿が揃っているとは思えなかったため、美音は食器も持ち込んだ。大半の料理は、その大皿にどーんと盛り付けている。

こうしておけば好きなものを好きなだけ食べられる。口に合わないものもあるだろうし、それぞれが食べる量もタイミングも違うだろうから……と考えてのこどだった。

「壮観ねえ……」

紀子は感嘆の息を漏らし、香織は写真を撮り始めた。どうやらSNSに記事をあげるつもりらしく『いいね』が増えるの増えないの、と嬉しそうに話している。

「佐島建設の社長夫人がSNSに夢中なの？」

馨は驚いたようだが、彼女自身もSNSを頻繁に利用している。実名が義務づけられているサイトなら簡単に辿りつけるし、もしかしたらSNSでの交流も始まるかもしれない。

女性はいずれも料理に満足してくれている様子。では男性たちは？ と美音は向かい側に目をやった。

要が料理の説明をしてくれている。イカナゴの釘煮を除けば、どれも一度は『ぼったくり』で食べたことがある料理のため、よどみなく説明が進んでいく。

説明の傍^{かたわ}らで、松雄は要が取り分けた料理のひとつひとつをじっくり眺めて口に乗ぶ。

あまり表情が変わらないから、気に入らないのだろうか……と心配していると、紀子が笑いながら言った。

「美音さん、あの人、かなり気に入ったみたいよ」

昔の男だから、食べ物についてあれこれ言うのは好ましくなく思っている。